視 点

『 湯 』

駐札幌米国総領事　ダーナ・ウェルトン

略歴：米国ノースカロライナ州生まれ。エール大学、ミシガン大学大学院卒業。プリンストン大学で芸術と考古学分野の修士号取得。米国国務省、ソウル米国大使館、大邱市アメリカ文化センター、在ジャカルタ米国大使館、わが国では在東京米国大使館、福岡、名古屋各領事館など 15 年以上に渡り、米国外交官として勤務。ロータリークラブの交換留学生として1年間熊本市に滞在。フーバーNSK（株）と日本精工(株)の国際部で勤務。ニューヨークメトロポリタン美術館、全米芸術協会学芸員として数年間勤務。

日本ではアメリカの大使館と総領事館は両国の祝日をともに休む。小さな贅沢だが、往々にして、平日のアメリカの休みには、私は一人で北海道の大自然を心地よく楽しむ。去年、滝野で歩くスキーを10KMし、春の野草を見ながら積丹を散歩、晴れた初夏の日、開拓村でカレーを食べて、歴史の跡をどれもこれもゆっくり流れ歩いた。秋には留萌の友人と、小平町の有機栽培トマトと懐かしい西洋野菜を現地の農家へ買いにいって、帰りは石狩湾を日暮れの美しい斜光の中、見霽（みはる）かした。

矛盾に聞こえるかも知れないが、総領事館の生産性の為、仕事をしないことも大事だ。

知識経済では、創造力は不可欠だ。

創造力はとらえどころのないものながら、それは人々の潜在意識から生まれるものである。創造力は夢と記憶が存在する場所にある。そして、気づかないうちに積み重ねて、パターンと新しい連想を形づくるものである。もし人々が創造力に新しい経験を供給しなかったり、横道にそれる自由を与えなかったら、人生の中で創造的な解決策を見出すことはとても難しくなる。空想を楽しむことは、ビジネスや政府官僚社会で成功するチームワークと同様に大切なことである。

私たちは皆、何かありふれたものからひらめきを与えられた発明家や科学者達について知っている。ニュートンは林檎が落ちたのを見て万有引力の法則をまとめた。アインシュタインは「想像力は知識よりも大切だ」という有名な言葉を述べた。また、彼は「論理は人々をA点からB点へ導く、しかしながら想像力は人々をどこにでも導くことができる」という言葉も残している。

もし人々が休むことなく働くならば、問題を解決するために新しい方法を見出したり、新しいアイデアを展開するために必要な刺激を十分に潜在意識に与えることができなくなる。人々は小説を読んだり、旅行をしたり、映画を観たり、家族と共に笑顔で楽しむ時間が必要である。音楽を聴いたり、静寂を聞くことも必要だ。寝る時間も。

という訳で、私が自分のオフィスの為にできるベストなことは、職員を6時に家に帰し、休暇をとって楽しむように働きかけることなのである。私のように。しかしながらどのように仕事をしないか、ということを理解するのがどれほど大変かも理解している。アメリカ人も日本人もどちらも長時間よく働く。年間で平均1700時間超で、世界中の先進国就業者の中でも長い。

5月のアメリカの戦没者追悼記念日で閉まった総領事館で余った仕事を終えてから、円山あたりをぶらぶら野鳥の声を聞きに登った。その日、娘は学校から帰宅、玄関から、「今日、母さんはまぁーた、温泉に行ったの？」

そう。当たっている。その日も、円山を降りて、車で小金湯に向かってきた。休みの日、どこに行っても、帰り道、必ず温泉に行くのは癖だ。素朴な露天風呂を見つければ大喜びだ。天然は最高だ。実は、G8の時、米大統領一行の高尚な仕事がたくさんあったが、本当に幸せだったのは、10日間、温泉町、登別で宿泊したことだ。地獄谷の裏の森の中の足湯は自分の桃源郷だ。

湯の付き合いが深くなったのは30年前の東京の大学生時代からだ。下宿して，四畳半の部屋から、毎日銭湯に行った。沈黙の私は日本語ができないと思ったおばあちゃんたちがいつも面白い近所の取りざたを話し合っているのを、盗み聞きして、お湯の温かさの歓を尽くすだけじゃなく、日本の社会入門もその場で教養された。肌で感じる。湯屋と床屋は噂の掃き寄せ。

私にとって、日本は、高校時代から、長い間、第２の「ふるさと」になっている。大学では、私は、「東アジアの言語と文学」を勉強した。二年生のクラスで、本物の小説を読み始めたときは、とても感動的だった。一字一句、辞書をひき、苦心しながらも、日本語で初めて読んだ短編を思い出す。辞書は、使いすぎて、「ネルソンの漢英辞典」を1年で、ぼろぼろにしてしまった。その短編というのは、志賀直哉の「網走にて」、北海道が舞台だ。平易ながらも美しい文章で描かれ、列車内で観察された主人公の人柄は、私に深い印象を与えた。でも、私が、特に、思い出すのは、教授が、クラスの最後に聞いたことだ。「網走はどこにありますか？」と。誰も知らなかった。そして、教授が、そこの監獄について話したとき、短編の全てが明らかになった。

この思い出が、札幌に来る準備をしていた際に、私の脳裏に戻ってきた。総領事は何をすべきかについて、考えていたところだった。そして、何年も前の私の教授を思い出した。何か話をする際、事の背景を与えることにより、はるかに多くのことを意味することができる、と言うことだ。これが、私が在任中にできることだと思う。詳細な情報や、物事をより明確にする。小さいながらも重要な洞察を提供することは、他国の人々が、米国や、また、我が国の政策、我が国の文化、我が国の価値観を理解していただけることにつながると思う。それは創造的な挑戦だ。